国際教育　第５号　（2012 年３月）

「再帰的な動作をあらわす動詞と名詞とのくみあわせ」について

～着衣動作と脱衣動作をあらわす動詞を中心に～

Combination Types of Reflexive Verbs and Nouns in Japanese:
With a Focus on *kaburu*, *kiru*, *haoru* and *nugu*

呉　幸栄
Sachie KURE

要旨

本稿は、形態論的に特徴づけられていない日本語の動詞における再帰的な動作をあらわす動詞のうちの、「きる」や「はく」「ぬぐ」などのような着衣動詞、脱衣動詞と名詞とのくみあわせについてしらべた。

奥田（1968～1972）と鈴木（2011）での分析をもとにして、単語と単語のむすびつき（連語）を研究対象とする、連語論的なアプローチの観点から日本語を母語としない学習者への指導の可能性を示唆する。

１．はじめに

一般的に「再帰動詞」とよばれる単語の種類のおおくは、「再帰代名詞」との共起を必要とする[1]。しかし、日本語には「再帰代名詞」（「自分」、「自身」をのぞく）とよばれるような単語の種類がない。英語においても、「～self」はあるものの、義務的にこれらの再帰代名詞と共起せざるをえないような再帰動詞はかなりかぎられ、たとえば、perjure oneself（偽証する）があげられる。

では、形態論的に特徴づけられていない日本語の動詞における再帰的な動作をあらわす動詞（再帰動詞）はどのようなものがかんがえられるのだろうか。

一例として、単語と単語のむすびつき（連語）を研究対象とする、連語論における再帰的な動作をあらわす動詞と名詞とのくみあわせにかんする記述をみてみる。

奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（1968～1972：1995『日本語文法・連語論（資料編）所収）では、以下のようにふれている。

> 「きる，まとう，はおる，かぶる，かぶせる，はくのような着物なりはき物を身につけることをさししめす動詞もとりつけ動詞のグループにはいるが，それが核となっている連語では，第二の対象をさししめすに格の名詞がかけていても，連語の名づけ的な意味の完結性はたもたれているようである。」（p. 28）

奥田（1968～1972）では、この種の連語の特殊性をみとめたうえで、「とりつけ」にいれられているが、３単語の構造を基本とする「とりつけ」と２単語の構造を基本とするこの種の連語のあいだには、たしかなちがいがある。奥田（1968～1972）はさらに、以下のような用例をあげ、第２の対象物をもとめないはずの「きる、はく、まとう…」の動詞グループが３単語の構造でつかわれることもあるが、それは特殊であるとしている[2]。

49）ちかづいてみると、素足にぞうりをはいている。（寺・165）
50）……身にはまっかな唐人服をまとい……（寺・105）

奥田（1968～1972）では、物にたいするはたらきかけをあらわす連語の下位タイプには、もようがえ、とりつけ、とりはずし、うつしかえ、ふれあい、結果的なむすびつきの６種があげられている。（おもに）３単語の構造において実現されるのは、とりつけ、とりはずし、うつしかえであり、もようがえ、ふれあい、結果的なむすびつきは、２単語の構造において実現される。このことは、鈴木康之（2011）『現代日本語の連語論』においての連語にたいする規定（かんがえ）と奥田（1968～1972）のそれのちがいをかいまみることができるだろう。鈴木（2011）は、むすびつきの具体的な実現である、２単語あるいは３単語（ばあいによっては４単語もある）の構造を大事にするのにたいし、奥田は、その２単語や３単語の構造に実現される、単語と単語のあいだのむずびつきのタイプわけをする[3]。奥田（1968～1972）と鈴木（2011）のちがいについては、また別稿であらためたい。

すでにとりあげられている、奥田（1968～1972）での記述をみると、「きる、はく…」などのような動詞（カザラレ）は、基本的に３単語の構造をとらないが、カザリであるを格名詞とのあいだの関係（むすびつき）はとりつけ的ということになるだろう[4]。

一方で、鈴木（2011）では、「きる、はく…」（「ぬぐ」をもあわせて）の類の動詞を「再帰的な動作」としてとりだすが、それぞれを「再帰的なとりつけのむすびつき」と「再帰的なとりはずしのむすびつき」にしている。すこしながくなるが、鈴木（2011）を引用しておく。

> 「再帰的な動作とは、一般に、「（むねに）ブローチを着ける」「セーターを着る」とか「（手くびから）腕時計をはずす」「ねまきをぬぐ」とかのように、自分自身のからだにかかわっての動作を意味するものである。「つける」や「はずす」は、一般的な「とりつけ動詞」や「とりはずし動詞」が再帰的な意味に使用されるのだが、「着る」「ぬぐ」などは、本来の再帰動詞（再帰的な意味専用の動詞）で、再帰的な意味以外に使用されることはなく、特殊な連語をつくるものである。」（p. 16）

このように、鈴木（2011）は、「再帰的な動作」を、とりつけ動詞およびとりはずし動詞が再帰的につかわれるばあい（いわば文法的）と、とりつけ的な再帰動詞およびとりは

ずし的な再帰動詞（いわば語い的）とにまずわける[5]。

奥田（1968～1972）と鈴木（2011）における「連語」にたいする定義のちがいはおいておいて、すくなくとも、どちらにおいても、この種の動詞とを格の名詞とのあいだのむすびつき（関係）は特殊であることがみとめられている。

本稿は、鈴木（2011）において限定されている、再帰的な動作をあらわす動詞と名詞とのくみあわせのうちの、いわゆる、「着衣動詞」と「脱衣動詞」をカザラレとするくみあわせについて再調査する。

２.「きる」「はく」「かぶる」など

現代日本語では、「上着をきる」「外套をはおる」「ズボン・くつをはく」「帽子をかぶる」のように、衣服類（くつや靴下もふくむ）のとりつけるさきによって、つかいわけられている[6]。

まず、「きる」や「はく」などの動詞とを格の名詞とのくみあわせによる２単語の構造をとる例１)、２)、３)、４）をみてみよう。

１）額田王は静かに**裳をはき上衣を着た**。(黒岩重吾・茜に燃ゆ／下巻)
２）ベッドから出て、**ガウンをはおる**と、矢代は、残ったウイスキーをあおった。(赤川次郎・探偵物語)
３）私は自分が全裸であることに気づき、**下着とズボンを穿いた**。(北方謙三・白日)
４）真由美が、髪を掻きあげて**ヘルメットを被った**。(北方謙三・傷だらけのマセラッティ)

つづいて、例５)、６)、７)、８)、９)、10）は３単語の構造（「きる」や「はく」などの動詞とを格の名詞とのくみあわせ＋に格の名詞）をとるばあいである。

５）上半身に丈の短い半袖の**衣を，下半身にサンポットを着る**。(砂川直哉/ 朴亨國/水野さや・アンコール遺跡調査報告書)
６）半袖のシャツの上に長袖の**スポーツウェアをはおる**。(NHK 取材班・シルクロード糸綢之路)
７）長期間仕事ができない状態が続くのは最悪だった。　一月二十八日、まだ包帯の残る頭に**帽子をかぶって**、軽井沢で上棟式に参加した。(玉村豊男・エッセイスト)
８）生理だと言いながら、素肌に**パジャマを穿く**ことも。(原田宗典・優しくって少しばか)
９）尻には漁網のような薄い**下着を穿いている**が…(天馬飛呂志・特選官能ラブロマン)
10）女のように長い髪をしており、頭には黒い**帽子をかぶっている**。(夢枕獏・闇狩り師)

これらの例文についてすこし補足すると、５）はアンコールワットで発掘された、バラモン像の特徴について説明する文脈で、６）は旅行手記での回想的な情景描写において、自分自身の服装を説明している。７）は６）同様、登場人物＝かたり手が（日記的なエッセイという種類のテキストにおいて）自身の過去のある出来事をおもいうかべながら、自身のそのときの格好を説明している。８）はある男がしりあいの女性のあきれた行動・行為をおもいうかべ（おもいかえし）、そのうちの１つを例にして、彼女という人間（の性格や性質）について説明している。一方で、９）の文は８）とおなじくある女性の一特徴（一側面）をさしだしているが（登場人物の男性＝かたり手による描写）、まさにかたり手（＝登場人物）のめのまえにいる女のことを問題にしている点で８）の文とことなる。しかし、「尻には」にとりたての「は」がつかわれることからもわかるように、彼女の格好や全身の装束をくわしく説明しているところで、「尻に」をとりたてた（ある意味、強調）かたちとなる。

２単語の構造とくらべ、３単語の構造のばあいは、第２の対象物（とりつけ先）の出現によって、カザリであるを格の名詞（第１の対象物）とカザラレである動詞のくみあわせによって表現される内容（名づけ的な内容）が特徴づけられたかたちとなる。実際の使用をみてみると、１）、２）、３）、４）とくらべ、５）、６）、７）、８）、９）、10）の文は、典型的な動詞述語文があらわすような、具体的で、アクチュアルな動的なできごとではなく、人やもの、あるいはものごとの性質や状態をさしだす。実際、例９）と10）をのぞけば、これらの連語が実現している文は、いずれも具体的な場面描写の文脈にない。これらの文は、動詞述語文ではあるが、（動作主体の）動作をあらわすいわゆる典型的な動詞述語文ではなく、（主語があらわす）主体の性質や一側面をあらわしている。

３.「ぬぐ」

「きる」や「はく」などのような着衣動作をあらわす動詞に対応する脱衣動作をあらわすのは、「ぬぐ」である。

11）汗ばんで、隼人は**上着を脱いだ**。（榎木洋子・聖剣現る！）

12）ボックス席に掛けると、彼は**上衣を脱いで**、さすがに額や首筋に滲み出ていた汗を拭っている。（夏樹静子・訃報は午後二時に届く）

13）東屋で、西田と清水は、ふたりそろって**トランクスを脱いだ**。（片岡義男・メイン・テーマ）

14）二人は詰所の玄関口で埃を払い、**下駄を脱いだ**。（秋山香乃・新選組藤堂平助）

15）飛雄馬少年は、（…中略）、**スパイクを脱いで**手でていねいに揃え、廊下に上がった。（横田順彌・山田太郎十番勝負）

16）ぼくはそうして、これまた反射的に**麦わら帽子を脱いで**胸に抱え、…（庄司薫・ぼくの大好きな青髭）

「きる」や「はく」とちがって、おもしろいことに、「(～を) ぬぐ」にかんしては、とりはずし先をふくめた３単語の構造での使用はみあたらない（すくなくとも現段階において)。このことは、とりはずしについての奥田（1968～1972）の記述を参照されたい。

「とりはずしがおこなわれるとすれば、そのまえに、を格の名詞でしめされた第一の対象が、から格の名詞でしめされる第二の対象に付着しているか、部分にくみこまれているかしているわけだが、その第二の対象はかならずしもから格の名詞でしめされてはいない。(…中略) したがって、とりはずしのむすびつきをあらわす連語の三単語的な性格は、とりつけのカテゴリーほど厳密ではない。」(p. 31)

奥田の記述にあるように、「ぬぐ」(再帰的なとりはずし) のような脱衣動作をあらわす動詞は、まず、身につけているなにか（衣服やくつ類）をとりのぞく、とりはずすということであれば、その「身につく／身についている」ことが前提となり、それ（とりはずし先）を第２の対象物で明示しなくても、再帰的なとりはずし動作は完結している。

そのかわりに、(ぬいだ衣服や靴類の) ありかをあらわすに格名詞が17)、18)、19) の例のようにあらわれる。

17) 彼女の女奴隷を数名引き連れて、一緒に沐浴にまいりました。彼女たちは**岸辺に着物を脱いで**、水に入りました。(岡部正孝・千一夜物語)
18) ハンカチーフ一枚分の**場所に靴を脱いで**座った部屋…（須藤八千代・ソーシャルワークの作業場)
19) 車の**トランクに**、**汚れた長靴と防水パンツを脱いでしまった**時、時刻は二時を回っていた。(大岡玲・ブラック・マジック)

このばあいの「ぬぐ」は、ただの「ぬぐ」ではなく、「ぬいで（＋おく)」までふくまれることもかんがえられ、うつしかえのむすびつきにちかづく。たとえば、例20) の「ぬいでおいた」と例21) の「ぬいでおく」が参考になるだろう。

20) 若い娘が梨の**樹の下に草履を脱いで置いた**まゝ、行方知れずになつたことがあつた。(柳田國男・柳田國男全集)
21) 日本やアラビアの家庭では**靴は玄関に脱いでおく**ことになっている。(リチャード・ルイス／ 阿部珠理・異文化へのグローバルガイド)

さらに、例22) の「ぬぎすてる」と例23) の「ぬぎおとす」の複合動詞の存在も「ぬぐ」のこういう特殊な性格をおしえてくれる。

22）横嶋が、汗で湿ったＴシャツを絨毯の上に脱ぎ棄てると、はだかの胸に、懐かしいふさふさとした巻毛と、…（末永　直海・合鍵の森）
23）彼女は、そういいながら、ワンピースのような服を、するりと床の上に脱ぎ落とした。彼女の裸身が、俺の目の前にさらけだされた。（横田　順彌・悲しきカンガルー）

ありかのに格があらわれることと関係して、「どこどこに　なになにが　ぬいである」の使用例はあるが、「きてある」や「はいてある」「かぶってある」はみあたらない。

24）ガラス戸に、『整肢整体研究室』と金文字で書いてある。狭い三和土に靴やサンダルが脱いであって、そこから家屋の中がすべて見透せる。（吉行淳之介・吉行淳之介全集）
25）脱衣室には、二人分の丹前が脱いであった。（山村　美紗・京都婚約旅行殺人事件）

「（～を）ぬぐ」から「（～に　～が）ぬいである」への派生において、ありかをあらわすに格の名詞をもとめるvalenceをあらたに獲得するこの現象は、26）の「そろえてある」にもあてはまる。もともともようがえ動詞である「（～を）そろえる」から「（～に　～が）そろえてある」というあたらしい動詞がうまれている[7]。

26）…こちらからドアを開けると、入口にスリッパが揃えてある。それを穿きなさいという意味だと察して、…（渡辺淳一・幻覚）

そのほか、14）（再録）、27）、28）、29）、30）のように、動作のなりたつ場所をあらわすで格の名詞があらわれる実例が多数みつかる。

14）二人は詰所の玄関口で埃を払い、下駄を脱いだ。（秋山香乃・新選組藤堂平助）
27）共有の玄関で靴を脱いで入る旧式のアパートだ。（中村智志・路上の夢）
28）ところが、玄関のたたきで靴を脱いでロビーに上がり、…（宇都宮俊晴・仕事を心から楽しめなくて、なにが銭もうけじゃ！）
29）玄関で靴を脱ぎ、たくさん並んだスリッパに適当に足をつっこんで室内へと入った。（あべ悠里・探偵恋物語）
30）女は（…中略）部屋の隅でジーンズを脱ぎ、シャツを脱ぎ、下着を脱ぎ、赤いエナメル地のボンデージスーツに着替えた。（小野一光・東京二重生活）

一方で、継続相「している」のかたちをとるばあい、「ぬぐ」あるいは「きる」は、「動作の進行中の状態」31）、32）、33）と「変化の結果の持続」34）、35）、36）の両方をさしだ

すことが可能で、文脈やコンテクストで判断するしかない[8]。

31) 腰を浮かして覗いてみると、たしかにドアが開き、**衿子が**体をこごめて**靴を脱いでいる**。「おうっ…」　風野は思わず立上りかけたが、…(渡辺淳一・愛のごとく)

32) **磯村くんは**上半身裸のまんま、**モソモソと靴下を脱いでいます**。脱いで片一方ずつを木川田くんに渡しました。(橋本治・無花果少年と桃尻娘)

33) 当時はまだこの防音用の壁がなかったもので。朝が多かったですね。**私が**顔を洗って**制服を着ている**と、聞こえてきたんです。(多和田　葉子・光とゼラチンのライプチッヒ)

34) **ブラントは上着とベストを脱いでいる**。やわらかな綿のシャツを通して胸の鼓動がジェニーの耳に伝わってくる。(永幡みちこ・黄金の誓い)

35) **バークリーは**撃たれたとき**シャツを脱いでいて**、遺体登録所へ運ばれる…(デイヴィッド・K・ハーフォード/ 松本　剛史・ヴェトナム戦場の殺人)

36)…由香利、圭一、清次の四人。休日なのでそれぞれ**私服を着ている**。(林トモアキ・ばいおれんす・まじかる！)

4．おわりに

日本語を母語としない学習者への名詞の「格」の指導はつねに問題とされてきた。たとえば、「格」というmarkedされる文法的な手続きをもたない中国語話者に、日本語の格システムをただパラダイム(Nφ、Nが、Nを、Nに……)で提示するだけではなく、「連語」という概念をもあわせて導入することによって、「布団を　たたむ」と「(壁に)絵を　かける」のような(他)動詞とを格の名詞「Nを」とのくみあわせのあいだに、ことなるタイプの関係(性)があることをしめすことが可能で、それによって日本語の格システムの深い理解につながる。本稿も、そのかんがえにもとづいて、限定的な範囲ではあるが、実例を調査した。

連語論的なアプローチのほかに、再帰動詞(および再帰構文)そのものを対象にしている先行研究は、多数ある。たとえば、仁田(1982)は、再帰的な用法しかもたない「着る、はく、脱ぐ」のような動詞を「再帰動詞」、普通の他動詞でありながら、その一用法として再帰的な用法を有する動詞を「再帰用法」とよんだ。仁田によれば、再帰とは、「働きかけが動作主に戻ってくることによって、その動作が終結を見るといった現象」であり、「動作主の動作が結局動作主に戻って来る」ような動作をあらわすのが再帰動詞である。このような再帰動詞や他動詞の再帰用法を自動詞と典型的な他動詞の中間にある存在として位置づけている。

高橋(1975)では、「羽を垂れる」「身をちぢめる」のようなくみあわせは、(他者である)客体に対するはたらきかけをあらわしているのではなく、主体である自分の状態をかえることをあらわすものとしている。を格の名詞と動詞とのくみあわせが、文でつかわれるさ

いに、ひとかたまりになって自動詞相当となり、合成述語をなす。何かを身につけることをあらわす「つける」や「きる」も、身につけたものは動作の後では主体の所属物となり、主体と客体が所属関係になる。また、高橋（1985）は、「再帰態はヴォイスとしては消極的である。他動詞を自動詞化することによって能動態からのがれさせる」と、ひろい意味でヴォイスとしての再帰態にも言及している。

そのほか、村木（1991）では、「浴びる」「着る」「はく」にくわえて、「（肩を）すくめる」「（首を）かしげる」「（まゆを）しかめる」などをあげている。また、を格の名詞と動詞とのくみあわせだが、「（自分の）手をたたく」「（自分の）足を折る」「腰を痛める」「風邪をひく」「下痢をする」「くしゃみをする」「汗をかく」などが慣用句的で他動性をかいていて、再帰性の特徴とつながると指摘している。

このように、自動詞（性）と他動詞（性）、ヴォイスなどにあわせて、再帰動詞（あるいは再帰構文）・再帰性を検討する先行研究がおおいなか、今回は、そのような観点までふくめて分析していないが、次のステップでおこないたい。

【注】

注１）たとえば、ドイツ語では、「動詞の目的語が動詞の主語と同一人または同一事物である場合、この動詞を「再帰動詞」といい、その目的語を「再帰代名詞」といいます。」（p.219、橋本1995）

次の例文のように、それぞれの文の述語につかわれるwäscht（あらう、３人称単数現在）とkämmt（とかす、３人称単数現在）は、sich（再帰代名詞）との共起現象がそれである。

例）Der Mann wäscht sich das Haar.（その男性は（自分に）髪をあらう。）

例）Er kämmt sich das Haar.（彼は（自分に）髪をとかす。）

注２）「身にまとう」を慣用句的な用法とみることもできそうだが、今回はこれ以上ふかいりしない。なお、用例番号、下線などは原文のまま。

注３）たとえば、カザリであるを格の名詞とカザラレである動詞やカザリであるに格の名詞とカザラレである動詞とののあいだのむすびつきのタイプわけである。なお、『日本語文法・連語論（資料編）』の「編集にあたって」に以下の一文があることに注目したい。

「連語論がとりあつかう対象は、連語の内部に存在している単語のあいだのむすびつき方であって、その名づけ的な意味ではない。」（p.10）

注４）対応する「ぬぐ」は「とりはずし」にいれられている。

注５）そのほか、奥田（1968～1972）において、ふれあいのむすびつきに位置づけられている、「背中をかく」や「手をこする、たたく」も再帰的につかわれると鈴木（2011）では位置づけている。

注６）今回は、着衣とかかわる動詞のみとりあげるため、鈴木（2011）で同じく「再帰的なとりつけのむすびつき」に位置づけている「赤ちゃんをだく」と「リュックを背負う」はあつかわない。

注７）呉は「してある」にかんする一連の分析において、文中にありかをあらわすに格名詞（に格補語）をもとめるvalenceをもつ、これらの「してある」動詞を派生動詞とし、結果存在動詞とよんでいる。

注８）なお、呉（2003）では、以下のような英文と和文の作例をつかって、とりあげている。

例）花子は いま **自分の部屋で** 着物を きている。

Hanako is putting on a kimono **in her room** now.

＊（動作のなりたつ場所をあらわす「Ｎで」が必要）

例）花子は きょう きれいな 着物を きている。

Hanako wears a beautiful kimono today.

【参考文献】

片山きよみ（2005)「日本語他動詞の再帰的用法について」(熊本大学言語学論集『ありあけ』５号)
呉幸栄（2003)「外国人のための日本語文法と日本人のための日本語文法」(『国文学解釈と鑑賞』７月号　至文堂)
呉幸栄（2004)「してある」の意味・機能について」(『鈴木康之教授古希記念論集』白帝社)
呉幸栄（2011)「２つの「してある」動詞」(『日本文学研究』50号　大東文化大学日本文学会)
言語学研究会（1995)『日本語文法・連語論（資料編)』(むぎ書房)
鈴木康之（2004)「奥田靖雄の連語論」(『国文学　解釈と鑑賞』１月号　至文堂)
鈴木康之（2011)『現代日本語の連語論』(日本語文法研究会)
高橋太郎（1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」(『国語学』103 国語学会)
高橋太郎（1985)「現代日本語のヴォイスについて」(『日本語学』4-4 明治書院)
高橋太郎（2009)『日本語の文法』(ひつじ書房)
宮島達夫（2005)「連語論の位置づけ」(『国文学 解釈と鑑賞』７月号　至文堂)
仁田義雄（1982)「再帰動詞、再帰用法－Lexico-Syntaxの姿勢から」(『日本語教育』47日本語教育学会)
村木新次郎（1982)「動詞の結合能力をめぐって」(『日本語教育』47日本語教育学会)
村木新次郎（1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」(『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版)
橋本文夫（1995)『ドイツ語の基礎（新版)』(郁文堂)

【＊用例の検索は、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」をつかっている。】